HEADLINE

第 27 回 中央大学ホームカミングデー	2－6
式と音楽の祭典	2
ビッグ座談会	4－5
箱根駅伝へ向けて　藤原正和監督に聞く	8
白門アーカイブ Vol.3「多摩移転の時代」	8

住所変更は学員会本部・支部にもご連絡を
システム変更に伴い、送付先住所が変更になっている場合があります。

中央大学 学員時報

白門同窓の情報紙

2018年（平成30年）11月25日日曜日　第504号

発行所　中央大学　学員会本部事務局

〒 101-8324　東京都千代田区神田駿河台 3-11-5
電話 03（3219）6175～6／ファクス 03（3219）6177
編集発行人 事務総長 髙嶋 民雄

卒業生 最大の祭典

お帰りなさい！ ようこそ、母校へ！

第27回 ホームカミングデー開催

卒業生が母校に集う一大イベント「第27回ホームカミングデー」が10月7日（日）、好天に恵まれた多摩キャンパスで開催された。今年は昨年の2倍を超える約7,000人が来場。会場は大いに盛り上がった。

過去最多7,000人が来場

毎年、さまざまな企画で卒業生を迎えてくれるホームカミングデー。今年も、式と音楽の祭典にはじまり、法曹界、政財界などで活躍する学員を招いてのビッグ座談会や経済評論家、上念司氏による講演会など、楽しいイベントが目白押し。昨年はあいにくの悪天候で中止となった白門駅伝大会にも親子連れを含む多くのランナーが参加し、青空のもと爽やかに汗を流した。

イベント終盤には応援部が演舞を披露。リーダーの気迫あふれるかけ声と心を震わせるような力強い太鼓の音が、参加者をそれぞれの「あの頃」へと引き戻す。最後は全員が起立し、ともに腕を振り上げて校歌を熱唱した。

その後ステージ上では特賞抽選会が行われ、スズキの 50cc スクーターや商品券など豪華景品の当選番号が読み上げられるたびに歓声があがり、会場は大いに盛り上がるなか、全イベントが終了。

大木田守ホームカミングデー実行委員長が、成功裏に終了したことへの謝辞を述べ、閉会の言葉とした。

リラックスした雰囲気のなか、個人はもちろん、親しい仲間、旧友、親子連れなどが思い思いに楽しいひとときを過ごし、まさに母校との絆を深めた１日となった。

箱根駅伝予選会

第95回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）予選会が10月13日（土）、東京・立川市の陸上自衛隊立川駐屯地スタート、国営昭和記念公園フィニッシュのハーフマラソン（21.0975km）で行われ、本戦出場11枠をかけて39校が熱戦を繰り広げた。各校上位10人の合計タイムで争われ、中央大学は10時間42分55秒で8位に入り、2年連続92回目の本戦出場を決めた。

写真提供：中大スポーツ新聞部

中大が8位で通過！

学員時報オンライン

学員会では、「学員時報」の記事や情報について紙面でお届けするとともに、オンラインにも展開しています。紙面掲載分だけでなく、オンライン限定記事も掲載しています。ぜひご覧ください！！

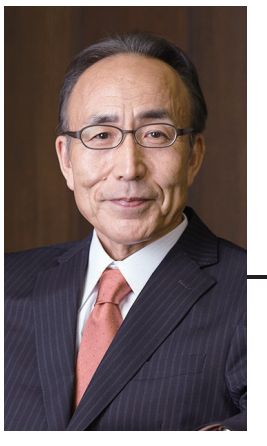
学員時報オンライン

臨時協議員会

開催日：2018年（平成30年）12月15日（土）
時　間：14 時（受付開始 13 時）
場　所：中央大学駿河台記念館２階281号室

議案
第１号議案　議長及び副議長の選任について
第２号議案　学員会役員の補充選任について
第３号議案　任期満了に伴う学員会役員の選任方法について

中央大学総長の選任について



中央大学は、10 月 15 日（月）中央大学駿河台記念館において、理事会を開催し、酒井正三郎現総長を総長に再任しました。任期は、2021 年 10月14 日（木）までです。

酒井正三郎
（さかい・しょうざぶろう）
1950年（昭和25年）生
68歳

旧交を温め、絆を深めた1日

式と音楽の祭典

開会――声を合わせ、心をひとつに

午前10時から、ホームカミングデーの幕開けとなる「式と音楽の祭典」が、9号館（クレセントホール）で行われた。理事長らの歓迎の挨拶に続き、第2部では白門音楽会として、学員や現役学生による歌声が披露された。

式典

大村理事長

酒井総長

福原学長

久野会長

親子三代表彰

大村理事長「絆を一層深める機会に」

第1部の式典では、校歌斉唱に続き、大村雅彦理事長、酒井正三郎総長、福原紀彦学長、久野修慈学員会会長が挨拶に立った。歓迎の言葉とともに大村理事長は、「ホームカミングデーが、学員の皆様と大学の絆、学員相互の絆を一層深める機会となることを願っています」と挨拶。久野会長が「今日1日、どうぞ楽しんでください！」と力強く述べると、会場は大きな拍手に包まれた。

続いて、中央大学「親子三代表彰」が行われ、4世代家族を含む4組の家族が登壇し、賞状と記念品が贈られた。

白門音楽会

中大横浜中高合唱部

混声合唱こだま会

美しい白門の調べ

第2部では、中大横浜中高合唱部、白門グリークラブ（学員）、混声合唱こだま会（学生）参加による白門音楽会を開催。中高生の明るく爽やかな歌声、グリークラブの包み込むような深みのあるハーモニー、現役学生による力強い合唱と、それぞれの特徴が存分に味わえる内容で、選曲もポップスあり民謡ありと実にさまざま。最後は3団体合同合唱が披露された。聴衆はリラックスした表情を浮かべ、ホールに響き渡る美しい音色を楽しんだ。

白門グリークラブ

第3回白門駅伝大会

リレーマラソンがスタート

“親子ラン”と“リレー”　約650人が参加

昨年は台風の影響で中止となった白門駅伝。今年は参加者の願いが通じたのか快晴の空のもとでの開催となった。「熱中症対策に気を配って、最後まで楽しく走ってください」という山本卓実行委員長の挨拶、陸上競技部長距離ブロックの花田俊輔コーチ（平14法）指導の準備体操に続き、まず行われたのは手つなぎ「親子ラン」。小学生以下の子どもと保護者が2人1組になり、特設コースを1.5km走る。95組の親子とともにゲストとしてロンドン五輪男子マラソン日本代表の山本亮コーチ（平19法）も参加。元気な子どもたちが保護者の手を引っ張る姿が目を引き、盛んに声援が送られた。

続いて行われたのは1チーム2～10人がタスキをつなぎ、2時間で特設コースをめぐり、距離とタイムを競う「リレーマラソン」。参加者のなかには第24回箱根駅伝（1948年）の優勝メンバーである内野慎吾氏（89歳）がおられ、大先輩が紹介されるとグラウンドは大きな拍手に包まれた。参加84チームのなかには「C」のマークや学員会支部名が入ったそろいのウェアに身を包んだ気合の入ったチームもあれば、和気あいあいとした雰囲気のチームも。応援部からエールを受けながら、思い思いのスタイルで気持ちのいい汗を流した。

大きな声援が送られた

笑顔でフィニッシュ

大人に混ざって力走

Homecoming Day

上念司（経済評論家）講演会――日本経済の行方

若手中心に約650人が来場 立ち見が出るほどの大盛況

講演会は8号館の大教室で行われ、自身の経済の見方や経済の基本原則を紹介。「世の中にはモノとお金しかなく、数が少ないものは価値が上がり、多いものは価値が下がる」という経済の基本をもとに、国債、金利、インフレやデフレ、消費税などのキーワードを織り交ぜながら、今後の日本経済についてを分かりやすく解説された。鋭い切り口に加え、メリハリの効いたユーモアあふれる明快な語りに、教室は何度も笑いに包まれていた。

上念 司 氏（平５法）
経済評論家、株式会社監査と分析 代表取締役

卒業後50年学員懇親会　1968年（昭和43年）卒

半世紀の時を経て、母校に集う

卒業から50年目を迎える学員が一堂に会する「卒業後50年学員懇親会」。今年は1968年（昭和43年）の卒業生が招待され、食事をとりながら旧交を温め、語り合った。タンゴ楽団の生演奏が流れる会場では、約300名の学員を前に、大村理事長、酒井総長、福原学長、久野学員会会長らが「お帰りなさい」との歓迎の言葉を述べ、各テーブルで笑い声が響く打ち解けた雰囲気のなか、各々が50年を振り返りながら楽しい時を過ごした。

また、別会場では、「卒業後25年学員懇親会」（1993年・平成5年卒）や、「卒業後5年、10年、15年、20年」を対象とした合同学員懇親会、有志による同窓会・懇親会なども開かれた。

芸術の秋、文化の華、私の趣味の世界

初開催！　作品展示や邦楽の実演も披露

今回、初めての企画となった「芸術の秋、文化の華、私の趣味の世界」では、芸術など趣味に打ち込んでいる学員の作品発表の場が設けられた。1号館では、毛氈（もうせん）の敷かれた縁台で野点傘のもとお茶とお茶菓子が提供された。その奥にある展示コーナーには現役学生や学員による書や絵画、陶器、写真などの作品が並べられ、来場者の目を楽しませていた。また、8号館では、経験豊富なベテラン学員たちの「日本伝統芸能を楽しむ会」による、尺八、謡（うたい）、義太夫などの実演も披露された。

展示された作品

尺八の実演

呈茶コーナーでほっと一息

▶第27回ホームカミングデー特別企画　ビッグ座談会

「我が人生の大いなる軌跡 ～母校中央大学の力と誇りを語る～」

今回の特別企画として、政界、財界、法曹界などでご活躍の学員の方にお集まりいただき、「我が人生の大いなる軌跡」と題した座談会を開催した。学生時代の思い出や大学への提言を、自身の近況なども含めて存分にお話しいただいた。司会を務めた学員で政治ジャーナリストの田﨑史郎氏のウィットに富んだ進行ぶりもあり、会場となった8号館大教室は時に笑いに包まれるなど、大いに盛り上がった。

司会・進行
田﨑史郎 氏
（昭48法）
政治ジャーナリスト

議論を重ねることで、物事の考え方の基礎を培った

大学に入ってすぐに、司法試験に合格するのは無理だと思った。それで何をやったかというと学生運動。2年の春の三里塚闘争で、竹槍を持っていて警察に連行された。最初の警察官による取り調べでは黙秘を貫いたが、次に検事の取り調べになって、その方が中央大学の先輩で、いろいろ説得された。

大学時代にやったのは、とにかく議論をすること。「白門ヘラルド」というクラブがあり、そこで盛んに議論をした。勉強はしなかったけれど、議論に刺激されて本はたくさん読んだ。そのときにどういう話をして、どんな考えを持ち、そしてそれがどういうふうに変わっていったか。考え方の基本形は大学時代にできた。だから学生時代を過ごした中央大学に、大学時代の仲間や友人に、いまでも感謝している。

人間性の涵養、陶冶に努め、法曹界をけん引する人材に

才口千晴 氏
（昭36法）
弁護士、
元最高裁判所判事

最高裁判所の判事時代も含め、弁護士、裁判官歴を合わせると52年ほどになる。学生時代で印象に残っているのは、大学の先輩でもあり大審院の裁判長を務めた吉田久先生の講義。この方は、1942年（昭和17年）の第21回衆議院議員総選挙で翼賛選挙の無効判決を出して東条英機らと戦った裁判官で、戦後は憲法の起草に携わり、司法の世界では、司法権の独立の条文を作ったのは吉田久だと言われている。その教えを受けた私が、また弁護士に戻ったのも、本学の建学の精神が生きているのかもしれない。

この大教室には思い出がある。ここで司法演習や破産法を教えていた。1年生への法曹論の講義では、法曹の資格や要件について話した。第一に喜怒哀楽ある心の温かさ、第二に共感し合える心の広さ、第三に問題解決の知恵、最後に、是非分別の判断能力を持つこと。そのことを再三説いた。正義についてもよく議論した。久野修慈学員会会長が吉田先生に正義とはどのようなものかを問うと、先生は「正義とは、倒れているお婆さんがいれば背負って病院に連れて行ってあげるようなもの」と答えたという。人間が人間を裁くのだから、法曹たるもの、人間性の涵養、陶冶に努めなければならないということ。

技術革新による社会変化に対応した法整備が急務

山岸憲司 氏
（昭45法）
弁護士、
元日本弁護士連合会会長

読売新聞社前にある箱根駅伝の歴代優勝校のパネルを見て、昭和30年代、中央大学は連戦連勝だったんだなと改めて思った。大学2年時に東都大学リーグで野球部が優勝し、提灯行列に加わった。大きなスポーツ大会で優勝すると、全国の卒業生が諸手を挙げて喜んでくれる。やはりスポーツの持つ力は大きい。

学生時代は、構内がバリケード封鎖されており、ほとんど授業がなかった。ゼミでは、司法修習生や裁判官の先輩が来て、実践的な指導をしてくれた。講義の思い出は、木川統一郎先生に「不可」をいただいたこと。自分で勉強すればいいと講義に出ずに試験を受けたところ、講義を聞いていないと書けない問題が出た。それを取り戻すために一生懸命に法哲学の勉強をしたことが、その後の弁護士人生の糧となった。

来年、国際経営学部と国際情報学部が新設されるとのこと。素晴らしいと思う。IT化が急速に進む社会をどう法的に規制し、コントロールしていくかは重要なテーマとなろう。日中法律家交流協会の会長をしていて感じるのは、日本の、社会変化に対する法制度の遅れだ。日本の司法は保守的で、裁判のIT化も中国に比べて遅れている。若い人たちには、中国に負けるなとエールを送りたい。

明日の日本を支えるため、国家公務員を目指してほしい

一宮なほみ 氏
（昭46法）
人事院総裁

もともと裁判官出身で、2014年（平成26年）に人事院総裁を拝命した。女性としてはもちろん、私立大学出身の総裁は私が初めてだった。大学1、2年時は大学がロックアウトされていて授業がなかったので、アルバイトに精を出していた。3年になってようやく司法試験の勉強を始め、4年時に研究室に入ってから本格的に取り組んだ。御茶ノ水の古い校舎で、朝から晩まで勉強していた。優秀な先輩方がまわりにたくさんいたお陰で、卒業した年に司法試験に合格し、翌年から司法修習生になった。司法試験に合格できたのは中央大学の研究室で学んだお陰で、大学には感謝している。

人事院は国家公務員の採用と試験を担当しているが、少子化の影響や地方の強い地元志向のため、国家公務員の志望者がなかなか増えない。官僚は国立大学じゃないと、と思っておられる方が多いようだがそうでもなく、人事院ではさまざまな大学から採用している。国内、諸外国との外交ともに難しい局面はあるが、こういうときこそ「實地應用ノ素ヲ養フ」という建学の精神が息づく中央大学出身者が力を発揮するチャンス。明日の日本を支えていただくために、国家公務員ならびに人事院にもぜひチャレンジしてほしい。

スポーツ企画＆その他企画

ホームカミングデーは、イベントが盛りだくさん

スポーツ企画として、ヒルトップ2階では、「中央大学――栄光のメダリスト」と題して、歴代のオリンピックメダリストたちの功績を写真とともにパネルで紹介。2020年東京オリンピック・パラリンピックの有望選手の等身大パネルも展示された。

また、ペデストリアンデッキでは、トレーニング機器の展示や体験会が行われた。

有望選手の等身大パネル

トレーニングマシンを体験

Homecoming Day

大学活性化のためにも、地方の受験生が集まるシステムを

尾家　亮 氏
（昭37経）
尾家産業株式会社
代表取締役会長

私が一生懸命に勉強をするようになったのは、3年でゼミに入ってからだった。印象に残っているのは、近代経済学の三宅武雄先生の授業。毎回、熱のこもった講義で、毎週欠かさず受講した。最後の講義で、こういう餞（はなむけ）の言葉をいただいた。「君たちは勉強が足りない。したがって知恵がない。だからこそ、実社会ではしっかり汗をかけ」と。私はある大手の企業に就職したが、東大出身者をはじめ優秀とされる人材が多く、私大出身者は最初から大事な仕事は与えられなかった。そのとき、「知恵がないぶん汗をかけ」という先生の言葉を思い出し、汗をかきながら懸命に業務に取り組んだ。その姿勢を会社が評価してくれて、責任ある地位につくことができた。

大学への要望としては、もっと地方から多くの受験生が集まるようなシステムを作っていただきたい。大学が中心になって地方を積極的にまわり、全国から受験生を集めることも必要ではないか。また、学員会副会長など学員活動も続けてきたが、学員会は努力をしているのだが若い会員が少ない。大学と我々がもっと力を合わせ、学員会で活躍する若い人たちが増え、中央大学を盛り上げていくことができればと思う。

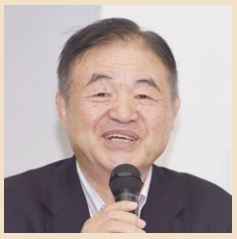
特徴ある教育内容と強い絆を有する、人間臭い大学に

平野博文 氏
（昭46理）
衆議院議員、
元内閣官房長官

大学がロックアウトされていた2年間は、御茶ノ水の「ハイライト」という喫茶店によく通っていた。思い出すのは卒業時のこと。吉久信幸先生の研究室に入っていたのだが、出席日数が足りずなかなかうんと言ってくれない。そこで1升瓶を買ってきて、「先生、卒業させてください」とお願いに行った。いまであれば大問題だが、当時は大らかなところがあった。それでも認めてもらえなかったが、追試を受けさせてくれて、ようやく及第点をいただいた。中央大学は全国各地から学生が集まってきていたので、交流を通じて色々な地域の思いに触れる機会に恵まれた。

文部科学大臣や大学の理事も務めさせていただいたが、大学改革の波が押し寄せるなか、中央大学の対応は遅れていた感が否めない。ようやく大きく変えていこうという動きが出てきたので、期待したい。改革案について私見を述べると、どちらかというと総合大学よりも、法学部など専門知識を中心に育成する大学を目指すべきではないか。中央大学は、大学と卒業生、卒業生同士の関わりが比較的薄い無機質なイメージがあると言われる。これからはもっと絆を深め、大学も特徴を有する、人間臭い大学になってほしいと思っている。

大学の存在感を高めるためにも、ぜひ箱根駅伝で優勝を



遠藤利明 氏
（昭48法）
衆議院議員、元国務大臣
（東京オリ・パラ担当）

私は法学部法律学科ラグビー専攻（笑）。入学式が終わっても授業はほとんど休講だった。体育の授業でたまたまラグビーを選んだのだが、そこで人生の師となる桑原寛樹先生と出会った。先生は90歳になられるが、いまでもご指導いただいている。当時の先生の言葉で特に覚えているのは、「最後まで練習についてこられなくてもいいから、絶対に途中で手を抜くな」ということ。そんなことを1年生のうちから教え込まれた。当時教わったものの考え方は、いま政治の世界でも自身のベースになっている気がする。

大学教育関係者とお付き合いすることも多いが、残念ながら中央大学の存在感は大きくない。会合などでも、中央大学の先生とはあまりお会いしない。もっと色々な場所に出て、中央大学はこういう考えを持っていると発信していただきたいと思う。2020年の東京オリンピック・パラリンピックをはじめ、日本のスポーツに関わる仕事をさせていただいていることもあるが、スポーツの持つ力は非常に大きい。オリンピックもそうだが、例えば金メダリストを輩出するとその種目の普及が進む。中央大学でいえば箱根駅伝。大学の存在感を高めるという意味でも、ぜひ箱根駅伝で優勝してほしい。

その他、落語家を招いての「はくもん寄席」、「スウィング部OBバンドライブ」、「学生ボランティア活動写真展」、「中大グッズ販売」なども多くの人を集め、各白門会による模擬店や法律関連の無料相談コーナーのブースも並んだ。

子どもたちに大人気だったのが、射的やヨーヨーすくいなどの遊具コーナー。景品の大きなぬいぐるみを手に、得意顔のちびっこも。理工学部の学生による、液状化現象や紫キャベツの変色を見る実験教室や、親子ポンポン教室、学生が指導してくれる書道コーナーや無料の似顔絵コーナーなども設けられた。

各支部の幟が立ち、多くの人が集まるメインステージ前の広場では、一緒に写真を撮り、肩を叩き合い、別れ際に来年の再会を誓って固い握手を交わしている姿もあちこちで見られた。

リケジョのわくわくこども実験教室

柳家小団治師匠

スウィング部OBバンドライブ

親子ポンポン教室

学員も　学生も　ご家族も　ご友人も

笑顔があふれる旧友との再会、心躍る新たな出会い。

白門のつながりを感じた1日

大村理事長から、白門グリークラブ（左上）、不動産建設白門会支部（右上）、司法書士白門会支部（左下）へ、それぞれ永年の活動に尽力された功績が認められ、感謝状が授与された。

SPORTS 中大スポーツトピックス TOPICS

相撲部
菅野陽太選手 法2 初の学生横綱に！！ 17年ぶりの快挙

第96回全国学生相撲選手権大会・個人戦が11月3日（土・祝）、両国国技館（東京都）で行われ、本学相撲部の菅野陽太選手（法2）が堂々たる戦いぶりで初優勝し、「学生横綱」に輝いた。中大勢としては第79回大会の豪風関（尾車部屋・成田旭氏）以来17年ぶりの優勝で、5人目の学生横綱となった。また、菅野選手とともに決勝トーナメントに進出した田中大介選手（文3）もベスト8に入った。

大学初タイトルを獲得した菅野選手

剣道部
全日本学生剣道優勝大会 24年ぶりに全国制覇！！

10月28日（日）に丸善インテックアリーナ大阪（大阪府）で行われた、第66回全日本学生剣道優勝大会・男子団体戦に本学剣道部が出場し、1994年以来、24年ぶりとなる通算13回目の優勝を成し遂げた。1回戦から危なげなく勝ち進んだ中大は、準決勝でも大将を残して決勝に駒を進める強さを見せた。連覇を狙う筑波大との決勝は2-2の引き分けだったが、本数勝ちし、悲願の日本一に輝いた。

平成最後の年に学生日本一に輝いた剣道部

サッカー部
関東大学リーグ 4年ぶりに1部昇格！

関東大学サッカー2部リーグの第19節が11月4日（日）、多摩市立陸上競技場（東京都）で行われ、首位の本学サッカー部が拓殖大と対戦し、3-2で競り勝った。同日、2位の立正大と、3位の日体大がともに敗れたため、勝ち点差はそれぞれ7と9に広がった。最終節で立正大と日体大の直接対決が残されているため、中央大は、3試合を残して自動昇格圏内の2位以上が確定。来季、4年ぶりの1部昇格が決まった。

1部に返り咲いたサッカー部

女子ラクロス部
関東学生ラクロスリーグ戦 創部史上初！！ 入替戦を制し、悲願の1部昇格！

関東学生ラクロスリーグ戦の1部2部入替戦が11月4日（日）、東京学芸大学グラウンド（東京都）で行われ、2部リーグに所属する本学女子ラクロス部が1部リーグ所属の学芸大に8-4で勝利し、創部史上初となる1部昇格を果たした。リーグ戦を5戦全勝で終え、1部との入替戦に臨むという展開は昨年と同様。昨年は敗戦を喫したが、今年こそはと挑んだ入替戦を勝利で飾り、4年生の引退に華を添えた。

1部昇格を果たした女子ラクロス部

支部からの呼びかけ

学員会本部では、支部活動の支援の一つとして、支部参加の呼びかけの場を提供します。各支部から寄せられた入会の概要やメッセージをご紹介します。

※すでにご投稿いただいていても、今号には掲載されていない場合があります。
次号以降、順次掲載します。

送付先
中央大学学員会
Mail：henshu@tamajs.chuo-u.ac.jp　FAX：03-3219-6177

白門44会支部“来年一緒に卒業50周年を迎えませんか”

入会資格 中央大学 昭和44年の卒業生もしくは昭和40年入学の方
入会金・会費 入会金ナシ。年会費3,000円
記念行事：**卒業50周年記念総会・2019年7月6日（土）11時30分・上野精養軒**
主な活動：総会・講演会（例年7月第1土曜日）、忘年会（例年12月第1土曜日）、
春秋のウォーキング、ゴルフコンペ、B級グルメの会、囲碁将棋会、
学生スポーツ応援会（駅伝、野球、ラグビー等）、
白門りんごの会（青森県三戸町との地域支援交流）、地域支部との交流他
連絡先 ●支部長　吉永 匡宏（090-5311-5161）
●幹事長　小畑 幸生（090-3533-2967）
ホームページ「白門44会」をご覧ください。

経理研究所主催 社会人講座のお知らせ

■社会人簿記講座
講義はWebを通じて配信します。受講期間中、何度視聴しても料金は変わりません。パソコン、スマホ、タブレットで受講可能です。2級講座は2月と6月検定の2回受験が可能です。法人の社員研修にもご活用ください。
●社会人簿記講座3級講座（2019年2月合格目標）
受講期間：12月～2019年2月検定試験日　26,000円（教材費、模試、税込）
●社会人簿記講座2級講座（2019年6月合格目標）
受講期間：11月～2019年6月検定試験日　60,000円（教材費、模試、税込）

■研究会「A＆B Forum」
―会員の方々の知性・感性の錬磨と異業種交流をかねたフォーラム―
実務の第一線で活躍する職業会計人、企業実務家、大学または研究機関の研究者を講師として招き、各界・各分野の専門家としての視点から、会員・受講者の“知的好奇心”を鼓舞し、知性・感性を錬磨する幅広い領域の「知」を提供します。
月例研究会を原則として開催月の第二水曜日（14時～18時）に中央大学駿河台記念館で開催します。
●研究会会費：法人会員150,000円、個人会員80,000円（税込）

講座案内をお送りいたします。経理研究所事務室までお問い合わせください。
ビジネスマンをサポートする中央大学経理研究所
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
TEL.042-674-4216　FAX.042-674-4214

「中央大学ブランド力向上企画コンテスト」審査結果

学員会は2018年度事業の1つとして、「中央大学ブランド力向上企画コンテスト」を開催し、12支部13の応募の中から、審査のうえ、最優秀賞1支部、優秀賞2支部、佳作3支部を決定しました。本コンテストは初の試みであり、支部会員の熱い想いが伝わる企画が多数集まりました。最優秀賞と優秀賞の2企画が、2018年度の後半に実施される予定です。

― 審査委員長・大橋正和（学員会副会長／学校法人中央大学常任理事）の総評 ―

ブランド・強味はインナーで共有したものを、外の様々なステークホルダーに対して発信していくものである。卒業生一人ひとりが持つブランドアイデンティティは人それぞれで、共通には語れない。大学生、受験生も将来に目を向けており、中央大学ブランドを普段は意識しにくい環境にある。

半年間と限られた期間ではあるが、学員会が主催する事業として、中央大学の強味、ブランドアイデンティティを学生が意識し、再発見できるような事業企画を選定した。事業が目的に合致しているか、向上効果が見込めるか、実現性はあるのか、現役学生サークル・団体、若手支部との連携で、若手世代の視点が活かされているか、大学がすでに実施している施策との重複はないか等の審査項目で評価した。

1 最優秀賞　白門57ネット支部
「中央大学ブランド力向上のためのセミナーイベント開催」

2 優秀賞　平成二年支部
「中央大学ブランド力向上のためのプロモーションムービープロジェクト」

3 優秀賞　平成二年支部
「足利市観光協会×中央大学 ブランド向上企画」

佳作

- **辞達クラブ支部**「中大が産んだ法曹界の英傑・花井卓蔵の生涯をドラマ化」
- **日野支部**「日野市自主防災会立ち上げプロジェクト」
- **高知白門会**「よさこいで大学日本一をめざすプロジェクト」

藤原正和監督に聞く

▶Interview◀

厳しい戦いが予想されるが、今回こそ、結果がほしい

目指すはシード権獲得！箱根駅伝へ向けて

陸上競技部 長距離ブロック

いよいよ箱根駅伝の季節が近づいてきた。中央大学陸上競技部は予選会を8位で通過し、本戦出場を決めた。前回の悔しさを晴らし、シード権をつかみ取ることができるか。学員会の髙嶋民雄事務総長が、現在のチーム状況や本戦への意気込みなどについて、藤原正和監督（平15文）に伺った。

藤原正和監督 平15文

――予選会を振り返っていかがですか？

前回の本戦の結果を踏まえて、今年は中間層を厚くして全体の底上げを図るというテーマのもと、チームづくりに取り組んできました。

予選会は8位という結果でしたが、昨年の予選会（3位）が本戦出場権獲得を最大の目標として臨んだのに対し、今年は本戦を見据えて、前回の本戦経験者をあえて使わずに、大舞台を経験していない選手を期待も込めて起用しました。そういう意味で、2年生がある程度結果を出してくれたのは、大きな成果といえます。

――本戦での目標は？

本戦での目標はシード権獲得に置いています。今回は4年生が充実しているので、彼らのけん引力にかけたいと考えています。堀尾（経4）、中山（法4）のダブルエースを中心に往路でいい流れを作り、前回、山上りの5区を経験した畝（法2）につなげたい。理想としては5番手あたりで往路を終えたいところですが、それはどの学校も同じでしょう。

近年、往路では大学間のタイム差が縮まっているのに対し、復路の6区から8区あたりの差が、シード権圏内争いに影響を与えています。往路で流れをつくるのが前提ですが、今回は特に7区、8区に焦点を当て、そこに自信をもって選手を送り出せるようチームづくりを進めています。

シード権を獲るのと逃すのとでは、1年間のスケジュールが大きく変わります。出場権を得ていれば、例えば春のシーズンにトラックでスピード強化に集中することができます。逆に秋の予選会にまわれば、夏前から長距離トレーニングに入らなければなりません。今回の箱根駅伝でも、1年間違うシーズンを送ってきた上位10校と戦うことになります。そうした状況から抜け出そうと、我々だけでなく多くの大学が必死になってシード権獲得を狙ってくるはずです。

目指しているのは8位ですが、現時点のチーム力はたとえ全員が持てる力を発揮したとしても12位程度と分析しています。これからの2カ月で、一人ひとりがどれだけ積み上げられるかが勝負です。そういう意味では、4年生をはじめ、選手全員に期待をしています。

――最後にメッセージをお願いします。

中央大学は6連覇を含めて14回もの優勝を誇る伝統校です。多くの方々からご支援をいただいています。そのご期待に何としても結果で応えたい。それがチーム全体の思いですが、一方で、強化には時間がかかるのも事実です。例えばいま結果を出している青学大は、チーム環境を整え、選手の意識を変え、それを走りにつなげるのに10年かかりました。登山にたとえるなら我々はまだ3合目あたりでしょう。しかし一歩ずつ、着実に前へ進んでいます。

トレーニングの様子

選手たちには、自分の目標に向かってトレーニングを積み重ねてきて、このチームで4年間、あるいは1年間やり通してきて良かったと思えるような箱根駅伝にするよう伝えています。私も監督として3年目を迎え、結果を出さなければと強く感じています。本戦では、4年生が中心となって一生懸命つくってきたチームの成長を、見ていただいている方に感じてもらえるような、そういうレースができればと思います。

白門アーカイブ

多摩移転の時代 Vol.3

多摩に土地を購入して20年、最初の移転計画が出てからは14年。そして着工から3年、キャンパスが晴れて1978年（昭和53年）に開校してから2年。これらの数字は、多摩移転を終えるまでに要した年月である。中央大学の文系4学部（法・経済・商・文）が、夜間部を含めて完全に移転を完了したのは1980年、昭和でいうと55年のことであった。

中大の多摩移転は他に類をみない巨大プロジェクトであった。関東大震災後、中央大学発祥の地である神田錦町から、靖国通りを越えて、坂を登って駿河台に移転したのとではわけが違う。江戸城を守る外堀から、新撰組の幹部たちが生まれ育った武州多摩までの距離はおよそ40キロ。約1万5,000人の学生と、ダンボールに梱包された膨大な量の研究図書が、西へと大移動したのだ。

貴重な図書の数々は、2年余りの突貫工事の末に1977年に落成した専任教員の研究室などと、キャンパスの中心に位置する中央図書館などに無事収められた。

一方で引っ越しが必要となった学生たちは、高幡不動、多摩センター、八王子に点在していた協力下宿や、一般の下宿に転居した。協力下宿とは、多摩移転にあたり急遽造成された学生アパートのことだ。大学が地元の有志に働きかけ、京王技術センター※1および金融機関との業務提携のもと、多摩移転開始年度の1978年の2月までに約1,000室分が造られた。当時は4畳半に共同トイレ、もちろん風呂などなくて銭湯通いが当たり前の時代。そこに内風呂が付いたハイカラな共同下宿が燦然と現れた。家賃は木造4畳半で1万9,000円、鉄筋6畳で2万5,000円と、一般的な相場と比べて格安であったため、申し込みが2,000件を超えるほどの人気であったという。

段階的な多摩移転の段取りに、都心で働く夜間部の学生の移転など、山積する課題をクリアするのに、一体どれほどのエネルギーを要したのかは察するに余りある。かほどのエネルギーを捻出することができたのは、第一に脱マスプロ教育のための教育改革という大義があったからだ。駿河台校舎は手狭で、テスト日に所定人数が正しく教室に集まれば、学生が座りきれずにあふれてしまう有り様。広い教室の確保は、大学の教育環境を定めた法的な面からも喫緊の課題となっていた。

一方で、東京を中心とする首都圏の整備をめぐる昭和30年代の政治の影響もあった。こうした大学を取り巻く政治社会状況も、多摩移転の引き金となったといえるかもしれない。

1956年（昭和31年）「大学設置基準」が制定され、施設面積についての新しい取り決めができた。同法では講義室・演習室は、全校舎面積の約53%が要求される。しかし残念ながら駿河台校舎では、図書室などの面積率の基準こそ満たしていたものの、講義室・演習室面積は基準のほぼ半分である26%にとどまった。急ぎ善後策を立てる必要が出てきたのだ。

3年後の1959年4月には、いわゆる工業等制限法※2が施行。同法は、首都圏の人口集中問題を解決するために、人口集中の原因と考えられた工場と大学の新設・増設を制限する法律である。これにより駿河台周辺での敷地面積増加の道が絶たれた。大学は同年12月、まるで法律に背中を押されるように、多摩・旧由木村の土地買収を評議員会で決定。翌年5月には土地を取得した。

続く1960年代は大学紛争の時代……。60年代の中頃から多くの大学に波及するようになり、68年、69年に激しさを極めた。中大では封鎖された校舎の代わりとして、多摩に急造のプレハブ校舎を建てた。これはあくまで臨時の措置であった。

3つ目の法律は、大学紛争がピークを超えた1970年（昭和45年）末施行の「都市計画法」だ。同法に基づく「東京都における市街化区域並びに市街化調整区域に関する都市計画」告示1404号により、多摩校地の施設建設を5年以内に開始しなければならなくなった。タイムリミットが1975年の12月25日という法的制約のなか、1975年4月、着工に漕ぎ着けた。

多摩移転の歴史を紐解くと、中大がいかに時代に翻弄されてきたのかを痛感せずにはいられない。しかしながら中大は多摩キャンパスの開校によって教育環境の改善を実現するとともに、研究体制の整備に務めた。1979年（昭和54年）には、従来の日本比較法研究所、経済研究所、経理研究所に加えて、社会科学研究所、人文科学研究所、保健体育研究所を新設した。また、経理研究所の資料部と研究部を統合した企業研究所も設置。1985年に創立100周年を迎え、1988年には卒業生が念願していた駿河台記念館を落成した。

そして今、中央大学は「Chuo Vision 2025」に基づいて2019年（平成31年）4月、国際経営学部を多摩キャンパスに、また国際情報学部を市ヶ谷田町キャンパスに新設する。さらに多摩キャンパスには学部共通棟（仮称）、グローバル館（仮称）、国際教育寮（仮称）を展開する予定だ。時代に翻弄されてばかりが中大ではない。次の時代を見据えて打って出るのが、130年を超える歴史で中大が培ってきた矜持である。

開校時（1978年）の多摩キャンパス全景（大学史資料課所蔵）

※1：現在の京王建設　※2：正式には「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」（昭和34年法律第77号）、2002年廃止